

氏名(本籍)	あびる まさひろ (長崎県) 阿比留 正 弘		
学位の種類	博士(経済学)		
学位記番号	博乙第1,121号		
学位授与年月日	平成7年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	社会科学研究科		
学位論文題目	Vertical Integration, Oligopoly and Welfare (垂直的統合、寡占および経済厚生)		
主査	筑波大学教授	経済学博士	酒井泰弘
副査	筑波大学助教授	経済学博士	小谷清
副査	筑波大学助教授	経済学博士	平山朝治

論文の要旨

本論文は、近時における産業組織論の展開を踏まえて、寡占企業間における垂直的統合が消費者、生産者および社会全体にどのような経済厚生上の効果を及ぼすかを理論的・制度的に研究するものである。

ある産業間における複数の企業間の垂直的統合とは、とくに中間生産物の売り手と買い手が合併して同一企業として、もしくは合併しないまでも共謀または協調したかとも同一企業のように、共同利潤額の極大化を目的とした行動に導く契約を結ぶことを言う。従って、垂直的統合はタテの取引関係にある企業合併を意味しており、同一の製品の販売や生産に関して競争関係にある企業同志のヨコの合併である水平合併とは概念上区別される。

しかしながら、現実の世界においては、純粹の垂直合併は起こりがたく、垂直合併と水平合併がミックスするのが通例である。その理由は、実際の合併の結果として、合併参加企業と非参加企業との競争関係が変化せざるを得ず、何らかの水平合併の効果が垂直的統合の効果に付随するからである。だが、従来の研究では、このような2つの効果の同時発生が無視されており、その点で大きな欠陥があった。本論文の目的はこの欠陥を是正するため、企業間の垂直的統合のもたらす純粹の「垂直的效果」と付随的な「水平的効果」を分離し、両効果の合成効果として、消費者や生産者の厚生レベルがどのようなインパクトを受けるのかを理論的に綿密に分析することである。

さらに、垂直的統合に類似する問題として、日本の生産システムとして有名な系列システムの1つとして、いわゆるトヨタの生産システムを取り上げ、そのワーキングを理論的・制度的の両面から解明している。

本論文は4章から構成される。第1章においては、垂直的統合が消費者の厚生レベルに及ぼす効果を理論的に厳密に分析する。もっと具体的には、ヴァーノン＝グラハムのモデルやグリーンハット＝太田浩のモデルを拡張し、上流・下流市場の双方にクールノー寡占を想定し、技術としてGES生産関数を想定する。その結果として、垂直的統合が消費者への厚生がプラスであることのプロセスが綿密に解明されている。第2章では、第1章と同様なフレームワークにおいて、垂直的統合が関係企業にとっても望ましいかどうかを吟味される。そして、企業への効果がプラスになるかマイナスになるかは、上流・下流市場における企業数に依存することが示される。

第3章においては、第2章の結果を補強するものとして、関係企業がはたして垂直的統合を行うインセンティブを持つかどうかを検討され、その結論を導く際に上流・下流市場の企業数が決定的な役割を示すことが示される。最後の第4章は第3章までとは趣をやや異にし、垂直的統合に類似する問題として、日本特有の系列システムという優れて制度的な問題が理論的・実証的に取り扱われている。

審 査 の 要 旨

最近におけるミクロ経済学の展開の影響を受けて、その応用としての産業組織論の発展にはめざましいものがある。本論文で扱う垂直的統合の問題は、産業組織論の1分野として、理論的にも制度的にも重要な問題である。本論文はこのような垂直的統合の問題に関して、幾多の新しい分析結果を導くことに成功している。以下、この点をもう少し詳しく述べる。

(1)理論的に見た場合、本論文の最大の貢献は、上流企業と下流企業との間の垂直的統合の総効果が、純粹の垂直的効果と付随的な水平的効果に分解されることを明確に示した点にある。従来の研究では、これら2つの効果の併存が十分に認識されておらず、あまり実りのない論争が行われていた。本論文では、垂直的統合が経済厚生に及ぼすインパクトの量と方向が、プラスの垂直的効果とマイナスの水平的効果との力関係によって決まることを明らかにすることによって、上述の論争に理論的決着を与えることに成功している。

(2)理論的枠組みの点から見ると、従来のモデルにおいては、上流・下流の市場の一方または双方に、独占や完全競争などの極端な仮定を想定することが多かった。これに対して、本論文では双方の市場に、より一般的な寡占市場を想定し、しかも技術としても要素代替を許す生産関数を使用している点は高く評価されてよい。

(3)本論文では、垂直的統合が企業の利潤に及ぼす効果を考察する際、上流・下流市場における企業数がクリティカルな役割を果たすことが示されている。これはこれまでの研究者が気がつかなかったオリジナルな結果である。

(4)最後に実証的研究として、日本の系列システムが制度的に緻密に分析されている。系列システムが垂直的統合の立場で分析し、そのワーキングとパフォーマンスが明確に分析されている点は評価されてよい。

以上の点は、本論文の独創的な貢献といえる部分である。だが、リスクや不確実性の視点やゲームの視点が欠けており、制度的研究もようやく端緒についたばかりである。この点はやや不満が残るといえるものの、本論文の価値をそれほど損なうものでなく、全体としての著者の力量は十分評価されてよい。

よって、著者は博士（経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。